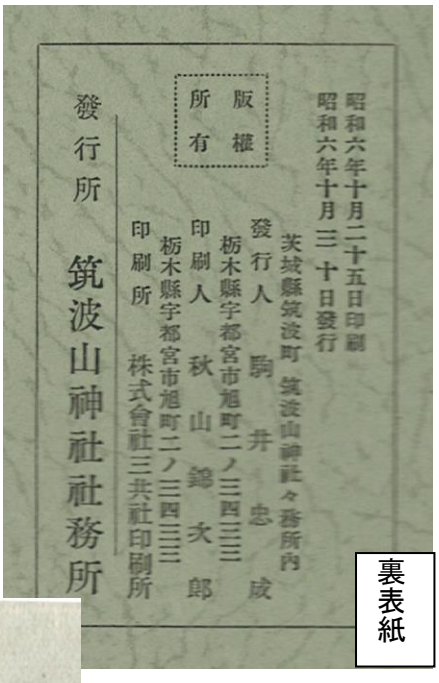
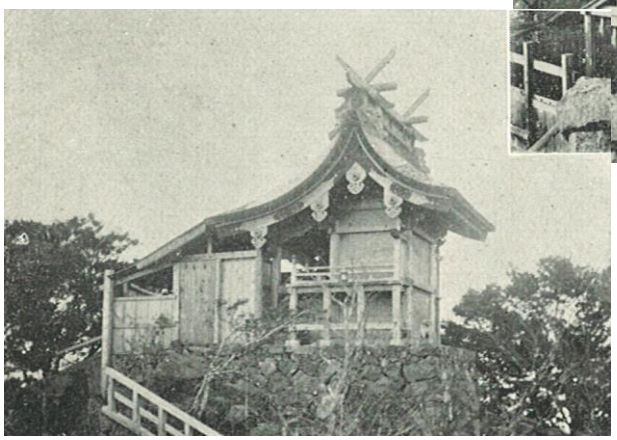
筑波山神社小誌　（昭和 6 年）

表紙（表）



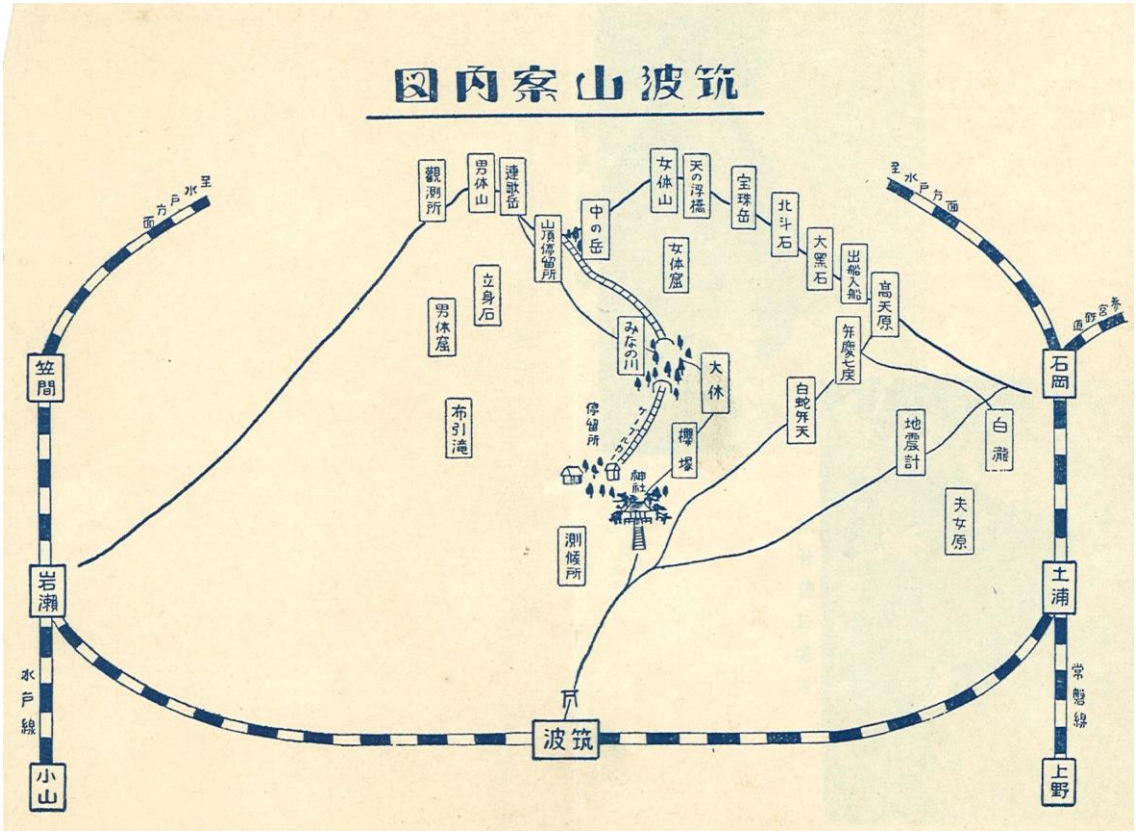
昭和六年十月二十五日印刷
昭和六年十月三十日發行
茨城縣筑波町　筑波山神社々務所内
發行人　駒井忠成
栃木縣宇都宮市旭町二ノ三四三三
印刷人　秋山錦次郎
栃木縣宇都宮市旭町二ノ三四三三
印刷所　株式會社三共社印刷所
版權所有
發行所　筑波山神社社務所

裏表紙



資料提供者：染谷　明氏（つくば市百家）
写真複写＆まとめ：御供文範・木村　滋

筑波山全景



筑波山神社小誌は、定期的に筑波山神社社務所が発行している。筑波山神社の祭神・創紀、所在地、社殿、社格・社務、摂社・末社、宝物、祭典、筑波山名所、ならびに筑波山の自然と題して本山の地質界、筑波山の気象、筑波山の動物界、筑波山の植物界などが記述されている。この昭和 6 年の小誌の作成は、駒井忠成氏と交友のあった、旧下妻一中（現　下妻一高）生物担当の染谷玄一教諭が担当したものである。染谷氏は独学で地質学、植物学を学び、当時茨城県博物学の専門家でもあった。

筑波山は生物の宝庫であり、牧野富太郎博士も数度来山している。「ツクバ」の冠する植物名も多い。

筑波山神社小誌

一、祭神、創祀

縣社筑波山神社の祭神は、筑波男大神、筑波女大神であらせられます。男大神と申し奉るは伊弉諾尊で、女大神と申し奉るは伊弉册尊であらせられます。

創祀の年代は詳かでありませんが、遠く上代に在るは萬葉集所載の丹比眞人國人の長歌に「二神の尊き山の並み立の見かほし山と神代より人の言嗣き云々」とあるによつても明であります。

二、所在地

當神社は、茨城縣筑波郡筑波町筑波山にあります。抑も、筑波山は、筑波、新治、眞壁の三郡に鼎峙し、坂東無雙の名山であります。西峯は、海拔八百七拾米突で、東峯は更に高いこと五米突、眺望絶佳、八州は、一眸の中にあります。西峯を男体山と申し、東峯を女体山と申します。神域參百五拾餘町歩、老杉古松鬱蒼として森嚴極ありません。

三、社殿

當社の本殿は、東西兩峯の頂上にありまして、西峯には、男大神をお祀り申し、東峯には、女大神をお祀り申してあります。

延曆元年、僧德一當山に錫を止めまして、山上の神殿を修築し、兩部習合の神社として、山腹に伽籃を創設しました。寛永十年、德川家光の寄進によりまして、山上兩本殿並びに攝社を建築し、本堂、五重塔、鐘樓、樓門等建築輪奐の美を極めました。明治維新神佛混淆の禁令の出ました時に、堂宇は悉く破却し、明治八年、新に拜殿を造營しました。現在の拜殿は大正十三年改築致したのであります。

四、社格、社務

當神社は、延喜式に筑波山神社二座と載せてあります。嵯峨天皇の朝、官社に列し、仁明天皇、文德天皇、清和天皇の朝、屢、神位を進められました。成務天皇の朝、阿閇色命を筑波の國造に封し、祭政一致の政策に基づき、當社に奉仕し、大化の頃迄、子孫相繼いで奉仕しました。皇極天皇、天武天皇の兩朝には圭田を賜はりました。延曆元年

僧德一兩部習合を以て、大伽籃に千手觀世音を安置し、知足院中禪寺と號し、神社を其の管下に置きました。鎌倉幕府は八田知家の八男筑波八郎出家して、明玄と云ひましたのを中禪寺別當に補し、子孫相繼ぎました。應永元年、社僧元海社務に盡力しました。慶長七年、德川幕府は、社領を五百石に改めました。社僧宥俊は中興の功があります。尋いで幕府は、社僧光譽に在府を命じ、當山に院代を置きました。元祿七年、社領を千五百石となし、寶曆八年、護國寺寺領の內千貳百石を以て堂宇營繕の資としました。明治六年十月、縣社に列し、祭主を置きました。尋いで祠官祠掌となし、明治二十七年、社司社掌に改め、大正十一年、社掌二名と致しました。

五、攝社、末社

攝社

一、安座常神社　素戔嗚尊を祀る。女体山寶珠嶽にあります。
一、小原木神社　月讀尊を祀る。女体山吉野嶺にあります。
一、渡神社　蛭兒神を祀る。女体山國割嶺にあります。
一、稻村神社　日神を祀る。女体山鷲嶽にあります。

末社

一、日枝社　大山咋神を祀る。拜殿の東にあります。
一、春日社　武甕槌命、齋主命を祀る。拜殿の東にあります。
一、嚴島神社　市杵島姬命、田心姬命、湍津姬命を祀る。隨神門の西北上にあります。

六、寶物

當神社の寶物は、維新の際、廢佛棄釋の厄に遇ひ、其の貴重品の大部を失ひ、現存するもの四十餘點であります。今、其の重なるものゝみを左に記述致します。

一、後陽成天皇宸翰　壹幅
　德川氏の寄進
一、後水尾天皇宸翰　壹幅
　德川氏の寄進
一、太刀
　德川家光の寄進、吉宗作、長二尺三寸、裝具赤銅、金葵紋散、國寶となつて居

ります。

七、祭　典

一、例大祭　四月一日に執行、往時、舊暦四月一日御座替祭を執行した日時を以て新暦に改めたのであります。此の日供進使が參向されます。

一、祈年祭　三月四日大祭でありまして、供進使が參向されます。

一、新嘗祭　十二月五日大祭でありまして、供進使が參向されます。

一、御座替祭　春秋二季に行はれ、春は、舊暦四月一日に、秋は、舊暦十一月一日に行はれます。昔は、夏至の日に、御神輿にて、女大神は、六所の社殿から山上の社殿に移り、男大神は山上の社殿から六所の社殿に移り、冬至の日に、男大神は、六所の社殿から山上の社殿に移り、女大神は山上から六所の社殿に移られました。近頃は、何時しか神御衣祭となりまして、右の日を以て臨時祭を執行します。

一、年越祭　舊暦正月十四日に執行せられます。厄除、家內安全、商賣繁昌等の祈禱を乞ふものが澤山あります。追儺式は舊暦正月十四日午前一時頃行はれます。其の他元旦祭以下諸祭典、制規によりて執行せられます。

八、筑波山名所

筑波山の登山口は東西南北にありまして、南を正面とします。卽ち、北條方面から、神郡臼井を過ぎ、筑波町を經て、拜殿に達し、道は、東西兩方に分れます。東口は柿岡方面から、小幡、十三塚を經て、東峯の山腹に出ます。西口は、上大島方面から、國松、沼田を經て、筑波町に出る一道と、紫尾から、直ちに、西峯に出るのと二つの道があります。北口は、眞壁地方から田村、伊佐々を經て、羽鳥から、直ちに、西峯に出ます。

近來、行通機關の發達に伴ひ、西口に、筑波鐵道の停車場が出來ましたから、沼田を通る自動車道に依る新道を普通の參詣道と致します。

一、筑波驛　土浦岩瀬間に鋪設せる鐵道の停車場で沼田にあります。

一、御成婚記念石の大鳥居　筑波停車場から、約百米突の所に、高さ九米突、笠木拾米突の石鳥居があります。大正十三年、御成婚記念として、茨城縣下貳拾萬の小學兒童と中學校生徒、青年團員、處女會員等の至誠の結晶によれるものであります。

一、御　橋　筑波驛で汽車を下りて、乘合自動車に乘りますと、御成婚記念石の大鳥居をくぐり、約參千參百米突の急坂を上りますと、御橋の下に着きます。御橋は、神

社の正面にありまして、德川家光の寄進した總朱塗屋根附の立派な橋で、春秋二季の御座替祭に御神輿が渡御になるのであります。

一、隨神門　御橋から石段を上つた所にあります。德川家光寄進の隨神門は燒けまして、文化元年元型によつて再建したものであります。

一、拜　殿　隨神門を過ぎて、石段を上つた所に拜殿があります。昭和三年、改築竣工、莊嚴なる權現造であります。其の上手に幣殿があります。

一、ケーブルカー　拜殿の西上から頂上御幸原迄延長千六百拾米突、所要時間九分のケーブルカーがあります。登山者のために便利であります。

一、櫻　塚　ケーブルカーによらず徒歩にて拜殿の西、男體山上り口の鳥居から四百米突程上で、若櫻のある所を櫻塚と云ひます。昔、春時、花爛漫たりしが何時しか枯果てゝ、今は、若櫻に昔を偲ぶのであります。

一、女男川　女體山の頂上から南方僅か下の岩間から清泉が湧出して四時絶えません西南に流れ、道を隔てゝ數尋の谷に落ちます。此の處を戀が淵と云ひます。男體山から湧出する橘井の水と合流して櫻川に流れます。「つくはねの峯よりおつる女男川戀そつもりてふちとなりぬる」の陽成天皇の御製は、百人一首で皆人の知る所であります。

一、布引瀧　女男川から約參百米突上り、左に折れ、壹千米突程行けば、百間澤と云ふ瀧川があります。大雨の時は、水聲激して、殆ど百間に及びます。遠望すれば白布を垂れたやうであります。

一、五　亭　明治維新の頃には、男體山頂上から聊か下、鞍部に五戶の茶店がありました。一を依雲亭、二を迎客亭、三を遊仙亭、四を向月亭、五を放眼亭と申しました。依つてこの名があります。今存するものは依雲亭のみで、其の店頭に揭げた扁額は、勤王の士藤田小四郎が此の亭に遊息の際、亭の一隅にうち捨てゝあつた一枚の板を取り、依雲亭と書し、小刀にて自ら彫刻したものであります。其の外、紫亭、「紅屋ホテル」があり、そこは、先年、守正王殿下がお泊りになつたことがございます。

一、立身石　五亭から男體山頂上に上る中途から左折し、約百五拾米突下れば怪巖の屹立するものがあります。これを立身石と申します。親鸞上人が錫を留めて、窮鬼を濟度し終に身を立てたと云ふので此の名があります。

一、男體山　西峯の頂上にして、筑波男大神の鎭座し給ふ本殿があります。

一、觀測所　男體山本殿の背後にありまして、明治三十四年山階宮菊麿王の御創立に係り、設備の完全せる点に於て本邦第一の山岳常設觀測所であります。明治四十二年

中央氣象臺に移管し、昭和四年鐵筋コンクリート式に改築されました。

一、連歌嶽　男體山頂上の南でありまして、日本武尊東征の歸途、此の山にお登りになり、更に、甲斐國においでになり、酒折宮にて「にひはり筑波を過きて幾夜かねつる」とお詠みになつた時、燭をとる者、恐みて「かゝなへて夜には九夜日には十日を」と下句をお附け申上げました。尊の御休憩所でありましたから左様に申します。

一、御幸原　男體、女體雙峯の鞍部を云ひます。男大神、女大神の往來し給ふ處と云ひます。依つて此の名があります。

一、女體山　御幸原から東に登れば東峯の頂上であります。女大神の鎭座し給ふ本殿があります。

一、荒雲嶽　女體山の東部で、夏期此の岩窟から黑雲を吐く時は、滿山忽ち煙霧冥濛電光閃き、雷聲轟き、驟雨直ちに至る、一に雷神の岩屋とも云ひます。

一、大黑石　荒雲嶽を東に下りると、高さ七米突に近い奇石があります。三方何れから見るも、大黑天に似て居ります。一に三面大黑とも云ひます。

一、寶珠嶽　女體山頂上から約參百米突東へ下りた所であります。攝社安座常神社があります。

一、吉野嶺　寶珠嶽から約貳百米突東であります。攝社小原木神社があります。

一、國割嶺　吉野嶺から約參百米突東へ下りた所であります。攝社渡神社があります。

一、出船入船石　國割嶺の東方に、二個の巨石があります。長さ約拾米突、船舶の舳艫相衡むの形の石であります。

一、胎內潛　出船入船石から東に下れば、貳拾米突餘の岩窟の上に、一枚石天井の洞があります。人、皆、屈んで通るのであります。

一、高天原　胎內潛の東部に聳立する奇巖を約參拾米突登れば一の高所に達します。此の處を高天原と云ひます。

一、鷲嶽　高天原の下で、昔鷲が住んでゐた所であります。攝社稻村神社があります。

一、石門　攝社稻村神社の西に、巨巖の左右立つて居る上に、大石が乘つてゐて、左右壹米突弱蓋の樣で墜ちさうな樣子であります。下を過る者概ね肌粟します。俗に鬼神返し、又辨慶七戻と云ひます。

一、地震研究所筑波山支所　東山行人塚にありまして、大正九年、東京帝國大學が地震

觀測調査及び研究のために創設しました。

一、白雲瀧　拜殿の東、古通寺の庭にあります。時々、白雲が横たはつて居ります。

一、楠正勝の墓　南朝の忠臣、楠正勝虛無僧となり、無月と號し、世を忍んで古通寺に住し、是處で遷化しました。庭前にある三重塔はその墳墓であります。

一、筑波山の日蔭蔓　明治大帝が大嘗會を東京に擧げさせられました時、筑波山の日蔭蔓が御用の光榮に浴しました。昭和五年、宮中御祭典用に二回重ねて御下命を給はりました。

一、杉の水　古通寺の下の靈井を杉の水と云ひます。

一、裳萩津　拜殿から東南の方、約九百米突の麓にあります。當神社では昔、每歲二月、八月の兩月に各二日を式日として、裳萩津の東西に幄を張り、東には童女、西には童男を集め、歌垣と云つて、童男先づ掛歌を唱ひ、童女同音に歌を唱ひます。嬥歌の祭と云ひます。童男は十三歲以下、童女は十二歲以下のものであります。此の祭、今は絕えてをります。この處を妹脊が原、又は、夫女原と云ひます。夫女石と云ふ二つの石があるからであります。又、形が龜甲に似てゐるから龜が岡とも云ひます。

一、筑波の義擧　世に知られてゐます。所謂天狗騷動は藤田小四郎等水戶の誠忠の士が

筑波山に據つて旗擧げされて明治維新の魁をなしたものであります。光圀卿以來培養して來た水戶學の精華であります。

一、筑波町　御橋の下、石段道の兩側が筑波町であります。昔の門前町でありまして明治二十二年町制を布きました。一丁目より六丁目迄あります。

一、石鳥居　筑波町六丁目の下に高さ三米突餘の石の大鳥居があります。こゝを六本松と云つて南登山口の正面の鳥居であります。

一、迎來橋　石鳥居より八百米突下にありまして、南登山口の入口で臼井の橋川に架つて居ります。筑波驛の出來る以前南口より參詣する人は、先づこの橋を渡るのであります。

（附）

筑波山の自然界

關東平野の北方、霞湖の勝景と相對して屹然雲表に聳える靈峯紫山は、確かに一大公園の觀があるばかりでなく、又一大博物園の感がある。今本山自然界の大略を記して讀者の參考に供したいと思ふ。

一、本山の地質界

(イ)、筑波山の成因

此山の成因に就ては多くの學者が研究されたし、今でも研究しつゝある者がある樣であるが未だ確實の處は不明の樣である。けれ共岩石の性質、周圍の地盤との關係から考へると可なり古い昔即ち地質學上中世代と言はれる時代（今から約二、三百万年前）に地下深所の岩漿が、其上を覆つてゐた古生代の地盤を押上げて一つの大きな山を造つたものであることが推察される。從つて其當時の筑波山は現在のそれとは比較にならぬ大きな山であつたのである。

其後地殼變動の爲に日本の大半は海中に陷沒して海底となつた爲、勿論筑波山も海中に沈んだのである。然るに其後再度海底が隆起して筑波山も海面に頂上を現はし一つの島を作つたが其れと同時に海面に頭を出した山々は現在の關東、越後、八溝、阿武隈、北上の諸山脈であつたとの事である。從つて渺茫たる大洋の眞直中に是等の山の頂上は點々として島嶼を造つてゐた事であらう。即ち荒波に洗はれる無人の孤島だつたのである。此時代は地質學上の第三紀と第四紀の間頃であつたとのことである。其後次第に砂礫は沈澱し、地盤は隆起して陸地を造り本山も遂に大きな山として高く聳え立つたわけである。此時代は今から二、三十万年も前の事であつたらう。そして海水は東に退いて今の太平洋となり周圍の低地には水が集り流れて今の櫻川、戀瀬川を造り波山の表面は雨雪に洗はれて內部の山骨を露はしたのが現在山を作つてゐる諸岩石である。山を削つた土砂は現在附近の耕地を造つたのである。思へばほんとうに蒼桑の變も甚だしいではないか。

(ロ)、此山の岩石

然らば此山を造つてゐる岩石は何んな種類であらうか。それは此山を造つた時地下深所に迸入した岩漿の凝固したものと、其時の熱や熱水の爲に變化を受けた周圍のもの

のとで詳しく言ふと種類は多いが著るしいのだけを略記する。

1. 斑糲岩の類＝是は以前閃綠岩と言はれたもので、暗綠色、暗綠灰白色、成分鑛物に細粗のある爲、外觀は種々である。露出範圍は南面ケーブルカーの隧道上口附近から上、西椎尾、北東は湯袋峠の東方一帶である。男、女体山頂の岩石は勿論是である。
2. 花崗岩の類＝是は山麓一帶に露出してゐる。此中にも次の樣な種類がある。
   斑狀黑雲母花崗岩＝小田、北條、椎尾附近にある。中に正長石の大結晶があるので知れる。
   黑雲母花崗岩＝眞壁山ノ尾附近に産するものは是である。
   巨晶花崗岩（ペクマタイド）＝成分鑛物が大結晶をなしたもの、眞壁山ノ尾に好露出あり。中に柘榴石を含む。
   球狀花崗岩＝是は筑波山の東北、柿岡の北方、吉生の峯寺下の杉林中にあるが一寸わからない。土地の人は小判石と呼んでゐる。中に球狀、橢圓狀等の紋があるからである。全國でも珍しいから序に記しておく。
3. 雲母片岩＝是は筑波の南方平澤山邊に露出してゐる。土地の者は礎石（オンジヤクイシ）と呼んでゐる。岩漿の爲に變質したものである。

二、筑波山の氣象

溫度　筑波山頂の平均溫度は九度二である。青森の平均溫度と同じであるが青森と比べれば夏は凉しく冬は暖く、炎暑の候と雖も三十度を越えることは尠く、酷寒の折と雖も氷点下十二度を降ることは稀である。

筑波町大字筑波、即ち筑波山神社拜殿附近の平均溫度は十度九であるが、此處は夏凉しく、冬暖いことを以て知られてゐる。今迄計られた中の最高溫度は三十三度三、最低溫度は氷点下八度四であると云ふ。

氣壓　氣壓は山に登る程低くなる。其割合は百米に付いて平均八粍六である。ケーブルカーで上り下りする時、耳が一時遠くなつた樣に感ずることがあるのは鼓膜の內外で氣壓が急に變るためである。山頂の氣壓は平地に比べて約一割低い。

風　山上では平地より概して風が強いことは言ふまでもない。即ち山頂の平均風速は山麓のそれよりも二米程速いそうである。併し何時でも強い風が吹いて居ると言ふわけではない。只平地に相當強い風の吹く時は、山上ではそれが數倍強く吹くのである。今まで計られた中の最も強かつたのは明治三十五年九月に襲來した颶風の七十二米一で

あると言ふ。それが如何に大きな風であつたかは、風の強い沖繩ですら五十米を越える風の吹いた事がないと言ふ事でも知られる。

併し斯様に強い風は筑波山上でも恐らく五十年に一度、百年に一度吹くか吹かないかのものであらう。

雲と霧　雲の最も低いものは層雲であるが、層雲と霧とは本質的には同じものであつて霧の高いものは雲、雲の低いもの即ち霧である。筑波山に雲のかゝつてゐる時は山上が霧に包まれてゐる時である。

筑波山頂が霧に包まれて居る日は一年の中二百四日位あると言ふ。

雲海　筑波山頂では脚下にだけ雲を見ることが尠くない。平野一面に低い雲が懸つて居て周圍の山々が其間から僅に頭だけ出してゐるのは海洋の中に島を見る様である。此の景色は雲海と稱し何處の山でも見られる現象であるが、視界が特に廣いだけ筑波山の雲海は特によろしいと稱へられてゐる。

濃霧　筑波山上では霧の深い時は十米先も見えない事がある。併し是が爲に遭難した話は聞いたことがない。只斯様な時登山途以外に入ることは戒めねばならぬ。

ケーブルカーの隧道附近は霧の境目になることが多い。

木雨　霧が深い時木立の間を通ると雫が雨の様に落ちることがある。ケーブルカーの山頂驛を降りて男体山或は女体山の登り口で木雨に遭ふて引き返さうとする人を往々見るが、木雨の場合ならばそこさへ抜ければ何事もない。

御光　若し男体山、女体山何れかの頂上に立つた時霧が吹きつけてゐて、太陽が背後に輝いて居たら（よくある）霧の方を注意して見られたい。霧の中に虹と同じ七色の光の輪が出來て、其中に鮮かな自分の像がスクリーンの上に映つて居る様に見えるであらう。時には此像が非常に大きく見えることがある。佛の御光或は單に御光と言はれる現象である。昔からブロッケンの妖怪と言はれて居るのは是である。

霧氷　冷たい霧が風に吹きつけられて、幹や、枝や、壁や、柱や、其他あらゆるものに觸れて美しい氷の結晶が出來、山一面に時ならぬ氷の花を咲かせる。土地の人はシガと稱してゐるが所によつては木花とも言ふそうである。氣象學上では霧氷と言はれる。何ともいひ表はし様のない美觀である。筑波山上は時々此の美しい現象を呈するので、これを觀賞かた〳〵近來冬の登山者が多くなつた。

雨氷　見掛けは霧氷と似てゐるが是は冷たい雨が物に觸れて出來たのである。物そのまゝ氷に包まれ電線の如きは太繩の様になつて垂れ下ることがある。地面は一帶に滑かな氷に覆はれるから滑つて歩けない。是も山一面に出來た所は霧氷と共に、雪景色とは又別な美しさである。

雷　由來關東地方は雷の多い所であつて、筑波山附近も、日光、秩父、甲信方面に出來る雷の通り路となることが多い。別に下の方で鳴るわけでもないが山上は雷雲に包まれることがあるから、避雷針や柱の尖などではシュツ〳〵と音をたてて放電することがある。山中にも度々落雷することはあるが其爲に怪我した人のあつたことは聞かない。

三、筑波山の動物界

筑波山の動物界は植物界に比べて科學的に研究した者のあることは未だ耳にしない。蓋し動物は移動性がある爲、概ね附近平地のものと共通してゐる事と、發見捕獲の困難な事による爲ではなかなうか。けれ共種々調査すれば中々面白い事が知れて來ようと思ふ。雜駁ではあるが參考の爲に聊か記すことにする。

(イ)、本山は附近動物の集合所になる—平野の中の孤山で周圍から目標になつたり、餌食植物が豊富であつたり、避難所になるのが其原因であらう。

(ロ)、分布力の盛なことを知ることが出來る—中腹の溪流に蝦、鰻、河貝子、線蟲等のゐるのは面白い事である。

(ハ)、漂鳥類の避暑地である—冬季附近の平野に活動するモズ、ヤマガラ、コガラ、ヒガラ、シジウガラ、ウグヒス等は夏季になると此山の谷間に樂しい生活を續けてゐる。

以上の様な狀態で多くの動物の棲んでゐる中主なるものだけを次に記して略解を附して見よう。

哺乳類

アナグマ—食肉類、ムジナ、サヽグマ等呼ばれてゐる。大き狸位、穴居して夜間活動する。各所の岩窟にゐる。筆者は昨秋是が仔獸を土地の人が飼つてゐるのを見たことがある。

キツネ—食肉類、大さ、體形共犬位、尾に長毛を有す。夜間活動し小動物を捕食す。本山各所に棲む。

テン—食肉類、體形イタチに似て少しく大、神社附近に棲息し夜間活動しネズミ等を捕食す。樹間を跳梁す。古來から雷獸と呼ばれたものは是である。

イタチ—食肉類、本山各地にあり。

リス—齧齒類、子供達の親友としてよく誌上を賑はす愛らしい小動物である。晝夜共林間を活動し果實を食す。運動極めて敏捷。

モモンガー—齧齒類、大さドブネズミ位、前後肢間に薄い膜があつて樹間を滑走して移動す。夜間活動して果實を食す。

鳥類

トビー猛禽類、大さ六六c.m.位、全身茶褐色、夏季山間にありてよくピーと言ふ鳴聲を發す。

ヤマドリ—雞類、本山裡山方面に多し。

キジ—雞類、本山裡山方面に多し。

メジロ—鳴禽類、本山棲息のものは特に「ツクバメジロ」と稱せられ鳴聲の著しいので愛鳥家の間に知られてゐる。

爬蟲類

マムシ—蛇類。內地産唯一の陸上毒蛇、常に樹下陰濕の處に棲息する。藥用になると言ふので採集せらる。

シマヘビ—蛇類、大きなのは長さ一五〇cm內外、本山到る處に棲む。民間藥にする爲に

捕獲せらる。

シロマダラ—蛇類、體長四・五cm、當地ではイツトキヘビと稱す。其數極めて少く、此山としては珍らしいと言はれる。

兩棲類

ハコネサンセウウヲ—有尾類、體長一二・三cm、本山到る處の溪流に棲む。余の經驗では男女川上流に最も多い樣である。子供の疳の藥になるとてよく採集せられる。

ヤマアカガヘル—無尾類、附近の平地には產しない。本山では筑波町から上方の溪流に棲む。普通のアカガヘル(日本アカガヘル)位の大さ、斑紋の狀態及鳴聲が異なる。藥用にせられる。

昆蟲類

モンキアゲハ—鱗翅類、クロアゲハに酷似するも後翅中央に一大黃紋があるので區別する。暖帶、熱帶の產で筑波山に棲むのは珍しい。多分幼蟲は柑橘類の葉を食ふ爲に本山にゐるのだらう。

クロタイマイ—鱗翅類、前後翅の中央を貫く靑色斑紋列があつて飛翔が速い。分布は廣いが當地では一寸珍物である。

コヒオドシ—鱗翅類、ヒオドシテフに似て極めて小形、體長は一・五cm位、開張五cm內外、此動物は內地では高山にばかり產するが、筑波山にゐるのは珍しい。余は昨秋筑波小學校で採集したのを見たことがある。

アサキマダラ—鱗翅類、前後翅共黑褐、大形白斑あり、美麗である。本山に極めて少い樣である。

コムラサキ—鱗翅類、翅の表面黃褐、斜に見る時は紫色を現はす。

スミナガシ—鱗翅類、全國的に山地に棲むが飛翔極めて速い。

アケビコノハ—鱗翅類、前翅褐色、枯葉狀、後翅橙黃色、二大黃紋がある。保護色、擬態の好例として臺灣のコノハテフと匹敵するものであらう。

ハルゼミ—有吻類、ヒグラシに似て黑味多く、五月頃出現してジーワ〳〵と鳴く。俗に蛇が鳴くと言つてゐる。

エゾゼミ—有吻類、形ミン〳〵に酷似する。八月頃出現し非常に大聲でガー〳〵と鳴く此附近では珍しいものである。

ナナフシ—疊翅類、綠又は褐色、體形枯枝狀、第一肢を延ばして樹上に留る時は枯枝と間違ふ。エダシヤクトリと共に擬態の好例である。

サハガニ—甲殼類、別して珍物ではないが本山到る處の溪流に棲む。登山者が亂採する爲に最近其數が減つた樣である。時に腹部膨大せるものがある。寄生蟲がゐるのである。

ヤマビル—環蟲類、少い樣だが本山にも產する。余は辨慶七戻附近で二回程採集したことがある。

四、筑波山の植物界

本山の植物は可なり其種類が豐富である。纏つた所で其種類の多いのでは縣內でも右に出るものは恐らくないであらう。そして又之を研究した者も多い樣だから將來益々鮮明になつて來ること、思ふ。次に其の大畧を記することにする。

(1)、本山の垂直的分布

麓から頂上に登るに從つて分布の狀態が略々次の樣になつてゐる。

山麓から神社の後方三百米標高の邊までは松林が可なり發達し、其中にシラカシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ等カシの各種、シヒ、リンボク等混生し、其下にオクマワラビ、イタチシダ、リヤウメンシダ、シヤガ、アヲキ、ミヤマシキミ等陰地性のものが見

られる。更に登るに従つてモミが混生し五百米邊に至れば次第に杉林が多くなつて來る。樹陰にはジヤコウサウ、ニリンサウ、ウハバミサウ、トキホコリ、カシハバハグマ、ウバユリ等の草本多く繁茂する。本山では此標高のあたり草本が最も多い様である。男女川邊の杉林をぬけると比較的矮小な落葉濶葉樹が多くなる。即ちツヽジ、ブナ、ミヅナラ、アブラチヤン、オホカメノキ等が多い。そして一帶にアヅマザサが此邊の處をとりまいて生えてゐる。フヂウツギが五亭の南面に多くあるのは一寸珍しい。

要するに麓からマツ、カシ、モミ、スギ、落葉濶葉樹と言ふ順に林を作り、五百米邊の處に草本が最も多い様である。裡山は又是とは異るが玆には略することにする。

(ロ)、各季節に於ける登山道附近の美花

四　月——五　月

ヤブデマリ—忍冬科、高さ三米内外の灌木、一個の花はアヂサヰの様で白色、是が密着開花して美しい。

コバノトネリコ—木犀科、落葉小灌木、羽狀複葉、白色の花を開いて人目をひく。ケーブルカー沿道にもある。

ヤマツツジ—石南科、全山到る處にあり。殊に頂上附近にあつて山景を飾る。最近之

を亂採して美觀を損ず。御互に注意が望ましい。

フヂ—萱科　紫色總狀に垂下する美は何とも言ひ難い感がある。

ヤマザクラ—薔薇科　數は多くないが春未だ淺い三月下旬から四月上旬にかけて杉林中に點々開花するを見る時吾人は實に高潔の感にうたれる。

ヤマブキサウ、セリバヤマブキサウ—共に毛莨科　五月上旬頃五亭附近を飾るヤマブキの様な黄色の美花である。

ミヤマシキミ—芸香科　筑波神社の後方陰地に多く、白色の花を穗狀につけて美しい。土地の者はツクバカウジと稱して八、九〇cmの常綠小灌木である。

ニリンサウ—毛莨科　東登山道の中頃に多い。地を覆ふて生ずる小草本である。葉は菊の様で花は一莖二輪位をつけ梅花の様である。

キクザキイチリンサウ—毛莨科　東登山道秋月休所附近に多い。菊の様な淡紫色の花を一莖一花宛開いて美しい。

カタクリ—百合科　頂上附近に極めて多い。葉が一、二花宛出て葉面淡白色の斑紋があつて葉も美しいが、それから花莖を出して紫色の百合に似た一花をつけたのは實に愛らしい。よく採集する者があるが球根は地下極めて深いから、中々採れない。

ほんとうのかたくり粉は是から造るのである。

ウテフラン—蘭科　是は立身石（名所）附近の岩上にある小草本である。紫色の小花であるが美しい。本山では珍しい。

五　月——六　月

オホカメノキ—忍冬科　頂上附近に多い。落葉灌木でアヂサヰに似た白色の花を開いて美しい。

ツクバネウツギ—忍冬科　櫻塚休所附近に多い。落葉小灌木で葉はウツギの様で花は唇形の白色である。

ヒラギサウ—唇形科　男女川休所附近の谷間に多く紫色の花を開く美しい草本である。

エゴノキ—齊墩果科　平地にもあるが白色の美しい花を開く喬木である。此木で種々な細工物を作る。

ミツバツツジ、トウゴクミツバツツジ—共に石南科　紫色の美しいツツジである。

キブシ—旌節花科　未だ葉の出ない頃總狀の黄花を數多くつけて美しい。中腹以上に多い。

サルナシ—獼猴桃科　蔓性植物で白色の花を開く。コクハと言ふのは是である。

ヤマブキ—薔薇科　中腹到る處に開いて美しい。

シヤガ—鳶尾科　筑波神社附近の陰地に多くイチハツの様な、そして艶のある葉で紫色の美しい花を開く。果實を結ばない。

六　月——七　月

タニウツギ—忍冬科　ウツギに似た落葉灌木で淡紅色の美しい花を開く。

ノリノキ—虎耳草科　落葉小灌木でアヂサヰの様な白色の花をつける。中腹以上に多い。

ヤマシャクヤク—毛莨科　五亭附近にあるが少い。シャクヤクに似た植物である。

レンリサウ—萱科　草原に多い半蔓性の植物で葉は直立する。紫色の美花をつける。

七　月——八　月

キンレイクワ—敗醬科　頂上附近に生ずるオミナヘシの様な黄色花を開いて美しい。

コシホガマ—玄參科　白瀧へ行く沿道に多い。桃色の花、きれ込みの多い葉、共に美しい。

シモツケ—薔薇科　東方中腹に多い様である。小灌木で美花を開くからよく栽培される。

カハラナデシコ—石竹科　中腹の到る處に生ずる。芝原に多い。
ヤマサギサウ—蘭科　東方の濕地に多い。栽培される。
ムシヤリンダウ—唇形科　松林等に多く紫色の美花を開く。
アヤメ—鳶尾科　東山の濕地に多い。
ギバウシ—百合科　陰地に多い。花葉共に美しい。
八　月——九　月
キハギ—荳科　ハギに似て淡紫色の小形花を開く。
ハ　ギ—荳科　よく知られてゐる七草の一つである。
チタケザシ—虎耳草科　中腹に多い。白色の花を穗狀に開く。
コアヂサキ、クサアヂサキ—共に虎耳草科　落葉小灌木で紅紫色のアヂサキに似た花を開く。
ヤマユリ—百合科　誰も知る芳香ある美花を開き極めて美しい。中腹の草原に多し。
ウバユリ—百合科　葉は網狀脈で白色大形の花を開く。葉に惡臭あり。中腹に多し。
コトヂサウ—唇形科　三百米標高邊の陰地に多く黃色大形の唇形の花をつけ美しい草本である。

ジヤコウサウ—唇形科　男女川附近の溪流に多くて紅紫色の鐘形花を開く草本である。
クサギ—馬鞭草科　平地にも生ずるが本山にもある。落葉灌木で葉は惡臭を發するが花が美しいので一寸目につく。
マツバニンジン—亞麻科　細長い葦の周圍に小葉を密生し高さ六十糎內外、頂上に紫色の美花を生ず。東山松林中に多い。
九　月——十　月
アキノキリンサウ—菊科　中腹以下の陽地に多い小草本で、黃色い花を密生して美しい。平地にもある。
ソバナ—枯梗科　高さ六五糎位の草本、紫色鐘狀の花を開く。
ツリガネニンジン—枯梗科　前者と似てゐるが葉、花を輪生する所が異なる。平地にもある。
マツムシサウ—山蘿蔔科　芝原に多い。草本一見菊花に似た淡紫色の美花を開く。よく栽培される。
ツリフネサウ—鳳仙花科　中腹の陰地に多い。柔軟な草本で、紫色の大形花をつける。

クサボタン—毛莨科　筑波神社附近に多い。一米內外の草本で紫色の花を多數附着する。
サラシナショウマ—毛莨科　五亭附近、ケーブルカーの沿道に多い。白色總狀の花を穗狀につける草本である。
フシグロセンノウ—石竹科　是も五亭附近の陰地に多い橙色大形の美花を開き人目をひく。
十　月——十一月
リンダウ—龍膽科　中腹に生じ紫色大形の美花をつける。
ウメバチサウ—虎耳草科　東山の濕地に多い。十五糎位の小草本である。梅花狀の白色花をつけて愛らしい。

(ハ)、「ツクバ」の名を冠せる植物

本山に產する植物で「ツクバ」の名を冠したものは筑波山特有の樣に考へられるが決してさうではなく、是は植物の蔓、苞等の部分が子供の玩弄物である羽子(ハネ)に似てゐるので斯く名づけたのである。但し中には本山特有の爲にツクバとつけたのもある。次に記した中で（特）とあるのは本山特有のものである。

ツクバネ—檀香科　本山中腹、到る處に生ずる半寄生植物、落葉小灌木で果實が羽子に似てゐるので此名を得た。
ツクバキンモンサウ(特)—唇形科　四—五月頃開花する小草本で本山到る處に自生するが他にはないとのことである。
ツクバネウツギ—忍冬科(前記)果實が羽子に似てゐる。
ツクバネサウ—百合科　中腹以上の陰地に生ずる。葉が輪生し其中央から一莖を出して開花する。
ツクバシヨウマ(特)—毛莨科　サラシナシヨウマの一變種。
ツクバネガシ—殼斗科　筑波神社附近に多い常綠喬木。
ツクバグミ—胡頽子科　白瀧附近に自生するグミの一種である。

(ニ)、附近の平地になくて筑波山にのみ產するもの。

菊　科　モミヂハグマ、モミヂガサ、キクアザミ
敗醬科　キンレイクワ
忍冬科　オホカメノキ
苦苣苔科　イハタバコ

唇形科　ツクバキンモンサウ
紫草科　ホタルカヅラ
徽形科　タヌキ
龍膽科　ツルリンダウ
馬錢科　フヂウツギ
石南科　トウゴクミツバツツジ
菫々菜科　エゾスミレ、フモトスミレ
瓜木科　ウリノキ
胡頽子科　ツクバグミ
省沽油科　ミツバウツギ
酢醬草科　ミヤマカタバミ
芸香科　フユザンセウ、ミヤマシキミ
萱　科　ジヤケツイバラ
薔薇科　リンボク、フユイチゴ、ミヤマフユイチゴ、ウラジロノキ
虎耳草科　ダイモンジサウ、ウメバチサウ
樟　科　アブラチヤン、クロモジ
殼斗科　ブナ

何處も同じ産地では名物として木細工、羊羹は御定まりで當地でも是等の賣店が片ツ端から客を呼んでゐる。買ふ買はぬは兎に角として材料樹木を調べて見るのも面白からう。

1. 食器類
箸類　コクタン、タガヤサン、クハ、ヒノキ
箸　入黒柿、柿(着色す)、サハグリ(着色)
杓文字　埋木(宮城縣名取郡産)、サクラ
茶菓皿　カヘデ、ケヤキ、サルスベリ
御盆　マツ、トヂ、サクラ、サルスベリ
茶敷　埋木(宮城縣名取郡産)、サクラ、サルスベリ、エゴノキ、トヂノキ
土瓶敷　ミカン、ウメ
盃類　サルスベリ

2. 家具、裝飾品類
花挿　サルスベリ、エゴノキ、モミの節部(溪流に倒れたモミの腐敗せる殘部)
枕　トヂ(折疊式のものはトヂの一枚板をくりぬきたるもの)
床置　埋木(仙臺名取郡の産)、靈芝(マンネンタケ)、大理石(本縣太田附近産の石灰岩)
柱掛　サルノコシカケ

パイプ　一寸面白いのにトヂの根を利用したものがある。
筆立　ケヤキ、マツ、サルスベリ、エゴノキ、モミの節部
煙草入　コクタン(熱帶アジアの産)、埋木(前出)、サクラ
七色入　マツ、エゴノキ

3. 杖の類
エゴノキ、サクラ、コクハ(一名サルナシ)、モミ、タケ(九州の産)

4. 玩具類
種々の玩具は何れもサクラ、トヂ、エゴノキ等を用ふ。

5. 臘葉繪はがき
ウスユキサウ(菊科)—高山植物、カタクリ(百合科)、イヌスミレ(菫々菜科)—寒地産、カウモリサウ(菊科)、ニリンサウ(毛莨科)、ツクバネ(檀香科)—寄生植物、ヤマブキショウマ(薔薇科)、シヤジクサウ(莨科)、イブキジヤコウサウ(唇形科)
右の中には筑波山にないものもある。

6. 蜜柑(芳香科)—フクレミカン
大署以上の様であるが、土産物の中には勿論本山の樹木を用ゐ本山で加工してゐるのが多いが、中には材料及加工品を移入して賣ものもある様である。

(ホ)、當町賣店の木細工と其材料

棗膏菜科　モウセンゴケ
狸藻科　ミミカキグサ
十字花科　ユリワサビ
毛莨科　フクジユサウ、ヤマブキサウ、セリバヤマブキサウ、ニリンサウ、イチリンサウ、キクザキイチリンサウ、ツクバシヨウマ
馬兜鈴科　ヤマシヤクヤク
檀香科　フタバアフヒ、サイシン
蕁麻科　ツクバネ
山和草科　ムカゴイラクサ
蘭科　ヤマトグサ
　クモキリサウ、ジンバイサウ、ヒトツブクロ、ミヤマウヅラ、ウテフラン、アツモリサウ、クマガイサウ
百合科　カタクリ、ユキザサ、ホトトギス、ウバユリ
羊齒類　ヒカゲノカヅラ
(註)　本植物は形紐狀をなし、四時綠色を呈して美しく古來より御祝事に用ゐられたる習慣あり、本山には往昔より之を產し、畏き邊りに獻上せしことありと。